

第3号  
＝通算53号＝  
(9・10月号)  
2017年9月7日

七里が丘子ども若者支援研究所

# 今を生きよう みんな OK !

## 権利と義務はコインの裏表か

不登校と呼ばれる子どもたちは「学校へ行かないの？」と“教育の義務”に苦戦する。社会的ひきこもりの若者たちは「どうして働かないの？」と“勤労の義務”、「税・年金・社会保険は？」と“納税の義務”に苦戦する。社会科教師だった僕も授業で「義務をはたすことが権利を実現する」と子どもたちに語っていた。いま、僕は子ども若者の実像を受け深く反省している。結論は、国民を義務で縛ってはいけない。

70年前、僕たちは基本的人権、教育・勤労・福祉(生存権)の権利主体となった。もちろん参政権もある。しかし権利を縛る義務がコインの表裏のように存在する。国民が国民を縛っている、同じ国民が。結果、「学校へ行かないと“国の役に立たない”子になる」「働かないと“国のためにならない”人になる」「税金を払わないと“国が亡びる”」、これは支配者の目線。「この土地に住まわせていただいているのだから、義務に従います」と。大宝律令時代以来の租税論？ 違いますよね。国民は個人として尊重されます。あらゆる束縛から解放されなければなりません。義務は不要です。最近の森友・加計には笑っちゃいますが教育・税制・行政を巡る“権力者”の問題。過労死(自死)・東京オリンピック・築地・原発・基地等も国民主権を蔑ろにする大問題です。教育・勤労・納税の義務を廃止し、支配者(誰でしょう?)から開放しましょう。



7月横須賀上町灯ろう夜市:川辺悟史さん撮影



## 8月応援団会議報告 のんびりとした会議もいい 涌井貴暁



安川さん、小幡さん、村上さん、今回が2回目の参加の竹内さん、そして私、涌井の計5名の小人数でした。なので、特に議題は決めず、それぞれが今感じていることを話し合いました。たまにはこんな感じののんびりとした会議もいいのでは？と感じた。そして、これからの応援団会議の在り方などを話し、滝田さんのこれまでの思いをみんなで繋いでいくことで一致した。それぞれの話の中で、地域の

事、貧困、不登校、ボランティアファミリーなど、子どもや若者の話が中心で会議は流れた。それぞれの問題の解決は簡単ではなく、長い時間がかかると思うが、問題の根は大人も子どもも教育(心の教育)が問題解決のカギではないかと私は感じている。国語、数学、理科、社会など、いわゆる勉強も大事だが、心の教育こそが最も大切ではないでしょうか。今現在、前者に偏りバランスを失ってはいないだろうか？私自身、子どもの頃を思い出すと、人間の生きる意味や、人として何が重要なのかをしっかりと教えてくれた大人は誰一人と居なかった。いつも他者との勉強などの競争に勝つことが、最も大事なことだと

子どもの頃や青年期、本気で思っていた。それが生きて行く意味だとも思っていた。10代のころは、好奇心や理性、道徳といったものを大切に、20代からは幸福や、徳というものを大切にしていけるような教育が必要ではないでしょうか。これは、ルソーの「エミール」という本にも書かれていることです。今の日本は大人も子どもも、真剣に心というものに向き合っているだろうか？そこに問題解決のカギがあるのではと私は思っている。

**コラム風** 暑いはずの8月は毎日が雨降り、今年は夏らしくなかったですね。そんなブルーな日々でも本研究所にはいくつか動きがありました。寄り添う研究機関として、生き辛さに苦戦する子ども若者と親御さんの問いかけへの伴走でした。三浦半島からは29歳若者の電話相談。仕事と生き方、安心と成長への理解を問うものでした。パワハラ＆ブラックな職場は、すぐ隣にあることを実感させてくれる若者の葛藤は「仕事を辞めてよかったんですね」「29歳でも(これからの仕事)大丈夫でしょうか?」、自己分析、嗚咽そして自分を認める語りへ。東京から応援団へ2回も参加した就活中の40歳Tさん、自分の人生を生きる姿を共有させてくれましたが、8月半ばに就職しました。県西からは中学生の親 Mさんが来室、誠実かつ必死にお子さんの育ちに取り組むゆえ、余裕が無く苦闘の日々。はき出し自己理解を進め笑顔の素敵なお親に復活。そして20年ぶりのSさん30歳との再会、至福の時でした。



鎌倉の花火

フリースクール準備中(鎌倉市深沢)“ふかふか：Largo(ラルゴ)”(右写真)では親の会・女子会を3回、ティーンストーク1回を開催させていただき、不登校の親御さんの不安への寄り添いと不登校の子どもたちの社会を見つめる“スゴサ”の再確認しました。涌井さんも参加、優しく語りかけて下さいました。会員・支援者のみなさまにとってもステキな思い出がこの夏にあったことと、ぜひ投稿をお願いいたします。



水澤麻美さん代表

## 子ども若者の未来の実現とは

**母親 M** 帰宅し、我が子の顔を見ました。一日自由に過ごしたことで、ニコニコしていました。未来に希望を持っていいよ、どんなふうにも生きて大丈夫だよ、そう伝えました。私は言いたいことも言う、でも、彼のすべてを受容できている…そんな一晩でした。

我が子がやらなければならないこと、越えなくてはならないこと、たくさんあります。これは紛れもない事実です。でも、それは今越えられなくても何とかなる…というか、越えられないのだからしかたないんですね。残念だし、悔しいし、母親の私の中ではたくさんの思いがぐるぐるしてしまいます。でも、我が子ならきっといつか越えてくれる。気づいてくれる。それが私の死んだ後でも気づいてくれればいいや。死ぬときに自分の人生楽しかったって、終わってくれればそれでいいやと思えました。

滝田さんがショートメールで、肩の力を抜いて、荷物を…と送って下さいました。あのメールを見て泣きました。わが子に背負わせるべき荷物も全部自分で背負って、彼の手を引き、時には彼を抱きかかえて、誰の山だかわからない山を登っていました。わが子が山を登らなくてはならないのに…。わが子には自分の荷物は自分で背負ってもらいます。

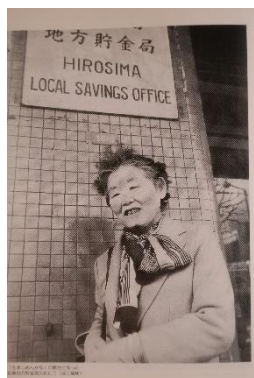
急に全部渡したら、立てなくなってしまうので、様子を見ながら。自分の山に登る彼を私は風になって見守っていかうと思います。できるだけ、涼やかな、深呼吸できるようなさわやかな風になりたい。今は熱風、強風になってしまいそうな私ですが、少しずつ良いイメージをもって日々過ごします。いつかは高原のそよ風のように・・・になりたいです。気を張り詰めて、頑張るだけ頑張ってきた私の心と体は、滝田さんのお話で緩みだしました。今までためてしまった疲労がこの数日で滝のように流れ出している感じです。失礼なことだとは思いますが。でも、滝田さんならわかっていただけか。それほど私は力が入っていて、自分に無理をさせていることにも鈍感だったということなのだと思います。(県西の方からのメール引用)

## それぞれの風 ○また時代の証人、長崎の被爆者、谷口

すみてる  
稜嘩さん(右:朝日新聞)が星になり天空で輝いた。焼けただれた背中をあらわにして「私の姿を見てしまったあなたたちは、どうか目をそらさないで、もう一度見てほしい」と訴える谷口さんは、「生き地獄＝被爆の実相」を生涯訴え続けた。核兵器禁止の国連決議につながった尊い行動を重ねて下さった。



○思い出すのは2006年3月6日に亡くなった“原爆”詩人、栗原貞子さん(左下写真:生ましめんかな現場で)。僕は1972年から30年以上、亡くなるまで生きる意味の教えを栗原さんから受けた。私たちの前の世代の東アジアへの侵略の謝罪は、次の世代である僕たちの果たす役割だ。次世代の平和な社会が築ける!と。栗原さんは被害者そして加害者としての深い思いを次のように歌っている。



(私は広島を証言する)1952/9 「生き残ったわたしは 何よりも人間でありたいと願い わけてひとりの母として …… どこへ行っても証言します そして『もう戦争はやめよう』と いのちをこめて歌います。」

(生ましめんかな)1945/8/30 「こわれたビルディングの地下室だった …… と、『私が産婆です、私が生ませましよう』と言ったのは さっきまでうめいていた重症者だ。かくてくらがりの地獄の底で 新しい生命は生まれた。かくてあかつきを待たず産婆は 血まみれのまま死んだ。生ましめんかな 生ましめんかな 己が命捨つとも」

(死んだ少女の声)1978/9/15 「今も水の底から 地の底から 死者たちは呼んでいるのに『奇襲攻撃だ』『シェルターをつくれ』と 声高に叫ぶカーキー色の狂信者たち。一度目はあやまちでも 二度目は裏切りだ。死者たちへの誓いを忘れまい。」

(旗 二)1975/9 「… 日の丸の赤は じんみんの血 白地の白は じんみんの骨 日本人は忘れても アジアの人々は忘れはしない」

○20年ぶりに Sさんと鎌倉駅西口カフェ・ロンディーノで再会、ご夫妻で登場です。僕は横須賀市のスペースゆうゆう(「適応」指導教室:不登校の子どもたちが通う学校外の教室)に創設から4年間従事、20年前のこと。その時の1期生(笑)Sさん、小学校ほとんど通わず5年生で出会い2年間交



流した。頭脳明晰で多感な少年だった。おとなしく寡黙だったが、極上の一言名言集をつかった逸材。僕が“右”と言えば“左”へ行動する最高の手本だった(大爆笑)。年上の仲間に可愛がられ、保護者・ボランティアさんのマスコットの存在でした。僕はSさんから不登校の子どもの“敏感さ 内に秘める”もの(希望)を実感させてもらっていた。「不登校なんて笑って吹き飛ばせ!」、Sさんの笑顔がいつも僕に語ってくれていた。そんなことを思い出させてくれた2時間はあっという間に過ぎた。

仕事場でお会いしたお嫁さんは笑顔とお話の爽やかな、Sさんが“趣味”、惚れているだと実感させられた彼女でしたよ! もちろんSさんも!! 同様、いやそれ以上に。

いま不登校で悩みの渦中の子どもたちへ、何よりも“将来”を案じてしまう親御さんの理解をもらいたいののでSさんの経歴をお伝えします。中学校から学校へ通い2~3年と学級委員、上達はしなかった(笑)剣道部で活動。高校はソロ30周年話題の桑田佳祐さんの出身男子校、そして都内私立大学・大学院で学んだ。現在、都内大学病院事務職。親御さんはゆうゆう保護者会・ボランティアの絶大な協力支援者。Sさんの育ちを急かさない、大きな大人でした。モチロン迷って悩んで・・・、でもSさんを信頼し期待していた親御さん。

僕の今のテーマ、《過去を問わない 現在の状態を責めない 今を楽しく 未来への希望を♡》ですね。Sさんと再会して、ますます確信です。

○県立岩戸養護学校夏季公開講座でお話をさせていただきました。「未来はどの子にもある～不登校・発達障害を超えて～」40人くらいでしょうか。参加者との交流が十分できませんでした。学校の「大変さ」を地域で共有する! 教育にお金をかける!! と質問にお答えしました? 旧知の教員の方にも再会でした。そして嶋原校長さんとは20年前の県横工高校で出会い、今も横須賀市支援教育委員で同席。シャイな笑顔が素敵な方、「地域に学校を開いていきます」とお別れの言葉をいただきました。

## 9月予定



9日(日)午後2時～ 応援団会議・・・

逗子市文化プラザ交流センター

16日(土)午後1時半から 横須賀市まなび館

(JRよこすか駅下車裏、京急逸見駅下車)

主催:さとにきたらええやん上映実行員会の主催  
連絡先

小幡さん(応援団 横須賀市議会議員)、  
沼崎さん(YMCA コミュニティサポート)

お詫び 発行が遅くなりました、陳謝。

また次号は11月1日発行です。ご容赦を。

発行編集責任者:滝田衛

住所:鎌倉市七里ヶ浜東2-31-12

連絡先:090-7212-4055 メール:[qq5656r9@happytown.ocn.ne.jp](mailto:qq5656r9@happytown.ocn.ne.jp)

